

# 藤井松平宗家の〈改易〉私考

～「あらぬふるまひするにより」（『徳川実紀』）とは？～

上山市立図書館館長 岩井 哲

## ■ 幕藩体制の成立と藤井松平氏

今年（令和4）は上山藩立藩から400年という。その400年のおおまかな流れを全国的な視野で概観してみると、まず石田氏の乱（関ヶ原の戦い）に勝利した徳川家康は全国を統一し、幕藩体制の整備に着手する。ただ国内全体を見渡したとき、西国（薩摩＝島津氏と長州＝毛利氏）と北辺（米沢＝上杉氏、秋田＝佐竹氏）の雄藩に対しては転封や削封によって一定程度弱体化をはかったとはいえ、気がかりな勢力であることに変わりはない。とりわけ日本最南端を領有している島津氏に対してはほぼ無処分のままであり、依然として現有戦力を保持した状態であった。したがって力関係もまだまだ不安定要素を内包していたのである。そんな状況を睨みつつ徳川家康は、安定的な政権の樹立と新たな全国支配体制の確立にむけ要所々々に信頼のおける大名を再配置していった。

\* \* \*

話を上山に向けると、400年前にあたる1622年（元和8）、初代藩主として4万石で統治を任せられたのが譜代の**能見松平氏**（松平重忠、重直）。つづいて1626年（寛永3）外様大名の**蒲生氏**4万石（蒲生忠知）が就封、外様とはいえ母は徳川家康の娘振姫。翌1627年（寛永4）より山形藩**鳥居氏**による城代管理となる。1628年（寛永5）からは**土岐氏**（土岐頼行、頼殷：よりたか）が着任し、2万5千石→3万5千石と2代にわたって65年間上山を統治した。その後、一時**幕領**となったあと、1692年（元禄5）から5年間、外様の**金森氏**3万8千7百石（金森頼峯：よりとき）が在封している。そして最後の大名として1697年（元禄10）に入部したのが**藤井松平氏の宗家**（一旦途切れたので上山松平氏とも称される）3万石（**松平信通、長恒、信将、信亨、信古、信愛、信行、信宝、信庸、信安**）である。実質的には1697年（元禄10）から1868年（慶応4）の戊辰戦争終結までということになる。1869年（明治2）から1871年（明治4）までは主体的に行政を執行する機能も権力もすでに奪われ空無化していたと考えられ、廃藩置県が断行された1871年（明治4）以前に幕藩体制は既に終焉し、1869年（明治2）にはすでに版籍奉還となっていたからである。

\* \* \*

ところで、寛政年間（1789年—1801年）江戸幕府によって編纂され、1812年（文化9）10月に完成した1,530巻にも及ぶ大名や旗本の膨大な家譜集がある。いわゆる『寛政重修諸家譜（かんせいちょうしゅうしょかふ）』である。それによると藤井松平氏は三河国を出自とする松平宗家に連なる「14松平氏」の一つの譜代大名にかぞえられている。「14松平氏」とは、竹谷（たけのや）、形原、岡崎（大草）、五井、深溝（こうず）、能見、長沢、大給（おぎゅう）、滝脇、福釜（ふかま）、桜井、青野（東条）、**藤井**、三木（みつぎ）それぞれの松平氏のことをいう。

その藤井松平氏だが、隆盛期（下総国古河時代＝現在の茨城県古河市）には9万石を有しながら、版籍奉還の時点ではなぜか2万7千石、つまり1/3にまで削封されてしまっていた。

ここでは、改易寸前にまで追いやられた古河時代の削封に至る経緯と原因(理由)をテーマとして、あくまでも推論に過ぎないことを自覚しつつ、ノートしていくことにしたい。

この難題に挑む前に、藤井松平氏の就封地の変遷についてひとまず押さえておきたい。図式的に変遷を表すと次のようになる。

三河国 碧海郡藤井／**利長** (500石?)・**信一** (現愛知県安城市一带) → 1590年：常陸国布川／**信一** (5千石) → 1601年：土浦／**信一** (3万5千石) 徳川政権樹立・幕藩体制の確立へ → 1617年：高崎／**信吉** (5万石) → 1619年：丹波篠山／**忠国** (5万石) → 1649年：明石／**忠国**・**信之** (7万石) → 1679年：大和郡山／**信之** (8万石) → 1685年：1万石加増で下総国古河／**信之**・**忠之** (9万石のうち1万石を**信通**に分与のため8万石、**信通**は1万石で興留藩を立藩) → 1693年：改易寸前、除封 → 家名再興・庭瀬／**信通** (2万石加増にて3万石) → 1697年：上山／**信通**～**信安** (3万石→2万7千石)



\* \* \*

さて、出自とされている三河国にまで一気に遡ってみる。藤井松平氏**中興の祖**は、1500年代初頭(享禄・天文・永禄)三河国(現愛知県一带)を中心に跋扈していたであろう松平宗家5代長忠の5男・**利長**(現安城市藤井周辺)とされている。ちなみに、徳川家康は松平宗家9代目にあたっているという。

利長の嫡男・**2代信一**(のぶかず)は1568年(永禄11)織田信長と近江守護である六角義賢(よしかた)・義治父子の間で戦われた観音寺の戦い(箕作城の戦い)において一番乗りを果たしたとされ、この働きをみた織田信長は「膽(きも)に毛を生する人」といい、自身が着ていた足利家より拝領の鹿革に五三の桐紋を縫い付けた韋戎衣(いじゅうい: 胴衣)を脱いで信一に与えたというエピソードが残っている。その後、1584年(天正12)小牧・長久手の戦い等を歴戦。石田氏の乱(関ヶ原の戦い)平定後の1601年(慶長6)、3万5千石の土浦藩主となる。**3代**は高崎藩5万石の藩主**信吉**。その後、藤井松平氏は宗家**4代忠国**(丹波篠山)と分家初代忠晴(駿河国田中)の二系譜に分かれることとなる。分家は版籍奉還を信州上田で迎えている。

## ■ 藤井松平宗家の改易

このノートのねらいは〈改易〉の理由を探ろうとするもので、あくまでも対象を藤井松平宗家のみとしてすすめていく。

丹波篠山を任された藤井松平4代忠国の時代、謀反の嫌疑をかけられた福知山藩稲葉紀通の城の接収という大任を果たし、2万石加増の7万石で播磨国明石へ。そこで忠国は嫡男信之に家督を譲り、その後**5代信之**は8万石で大和郡山に移る。さらに老中に昇進し1万石加増の9万石で下総国古河へ転封。その古河において**6代**の**忠之**に繋ぐ。その際、忠之は1万石を弟の**信通**に分与し、8万石として古河を統治している。

このように石高の変化のみで見ると、ここまで藤井松平宗家はきわめて順調な歩みであった。しかし、その6代古河藩主忠之の時代に「除封」「改易」という大きな厄災がふりかかる。

資料を辿っていくと、その厄災に見舞われた理由が記されている。しかしどれもみな抽象的な表現となっており少しも実態が見えてこない。忠之の「御狂疾」とか「失心」と記しているだけなのだ。考えてみると身内の伝記では通常都合の悪いことは可能な限り粉飾したり隠匿する場合がほとんどと考えられるが、本家本元の家譜ともいえるべき『藤井御傳記』にさえ、「御狂疾に罹

らせ玉ひ、…中略…古河城召上げられ、御弟涼應君（信通）にあづけられ玉ふ」とあからさまに記されているのである。

しかも同書には忠之の病変に至る前後の様子と、さらにその後の藩内外の慌ただしい動きが延々と綴られている（同著 85頁～87頁）。それを読むと妙に切迫感があるが、この史料を読む場合大事なことは、その「病変」の表現に拘泥し過ぎることなく時系列で状況の推移をみていくことであろう。「御狂疾」のきっかけは、明らかに老中戸田山城守の代理で派遣されて来た2人の遣いと忠之の「御面謁」、ましてや近習たちを席払いさせたうえで行われた「御面謁」にあったということである。長くなるが引用してみたい。

「略…御老中戸田山城守某の内意もて御同姓、伊賀守某、秋田淡路守某、来臨ありて君に御面謁あり。然れども近習の輩を遠ざけ玉ふをもて、其事詳ならされども、君に仰を含められし御事ありて、両侯帰らせられしが、君気色甚だ常ならず。その夜中御寝所騒が敷御声聞え、御次番の輩御動静を伺ひしにのち、召して怪敷夢見玉ふ由仰せられぬ。その晩又々御声かけられ、推参なるやつ髪を切れといふ事かと仰ありて、御唐紙の戸へ御差添もて切り付け玉ふ。のち御静まりありしかど、御髪切らせられぬ。されど御容体御平常の如く、御用人召して仰けるは、斯る体にて何事を申せしとも用ひ難く、そんすべければ、この由とくとく求馬方へ申遣すべしと御意ありければ、急ぎ出府あるべき旨早打もて之を古河に伝ふ。また御家臣等各評議ありて、翌二十四日朝、若山六郎左衛門某をもて、伊賀守某の御許へ君のご容体を具に告げ申せしといふ。…略」

これは祝（はふり）正栄家で「古河変事録」として筆写したものとのことである。

読んで明らかかなように、忠之は「御面謁」の後に、激しく変調している。「君に仰を含められし御事ありて、両侯帰らせられしが、君気色甚だ常ならず」の表現は、遣いの者たちの所作や、発したであろう言葉に、忠之が尋常でない衝撃を受けたことを意味して余りある。

繰り返しになるが、あえて藩主の病変、ましてや伝記で表現されているような「御狂疾」について、事細かに家譜に遺しておくこと自体異様に思え、違和感を感じてしまうのは筆者だけであろうか。しかもそれを改易の直接的な理由としていることも解せない。

\* \* \*

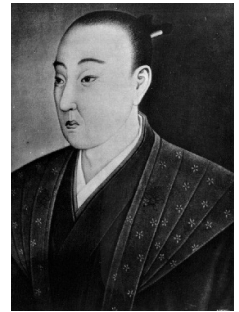
では、「御狂疾」というように、『藤井御傳記』には精神病理学的な視点でのみ記されているが、果たしてそのとき古河藩内、いや忠之の身にいったい何が起こっていたのであろう。それを知る手がかりとしてまず徳川宗家＝幕府の立ち位置から書かれている『徳川実紀』を紐解いてみる。すると、第6編182頁に「失心」「あらぬふるまひするにより除封」とあった。「失心」は「失神」とほぼ同義語と考えられ、本心を失う、正気を失うという意味であろう。『藤井御傳記』にある「御狂疾」＝発狂とはいくらかニュアンスは別であろう。『徳川実紀』という書物の特質から考えると、もしかしたら暗に徳川家に対する忠誠心を失ったという意味で表現されているとも取れなくもない。では「あらぬふるまひ」とはどのような振る舞いであったのだろうか。残念ながら『徳川実紀』にそれ以上の詳しい記載はなかった。

しかし、その時代の幕府執政のなかで起こった出来事や、藤井松平氏のお家事情などを少し調べていくと、そこに明石時代の信之から古河の忠之の代まで関わりを持ち続けたひとりの経世家（陽明学者）の存在が浮かび上がってくる。

## ■ 熊沢蕃山と藤井松平宗家について

その経世家とは熊沢蕃山という陽明学者である。蕃山は、1619年（元和5）浪々の武士野尻一利の長男として京都に生まれ、その後母方の祖父である水戸の熊沢守久の養子となる。ご存知のよ

うに水戸は水戸光圀以来『大日本史』の編纂を手がけている尊皇気風の藩であり、蕃山の思想形成に少なからず影響があったと考えられる。16歳のとき京都所司代板倉重宗等の推薦で備前岡山藩主の池田光政に仕官。蕃山19歳、光政の参勤に従い江戸に上る。だが、島原の乱への従軍をめぐって、主君の命に背いたことで岡山藩を致仕。近江に移り学問に励むが独学に行き詰まり、模索の日々を送るなか、23歳の蕃山は、儒学者でわが国の陽明学の祖といわれる中江藤樹と出会う。そして、学問を積み再び岡山藩に招かれ仕官している。1672年(寛文12)初版刊行の『集義和書』や、1686年(貞享3)～87年(貞享4)にかけて「或るひと…を問う」の問答体で記された『大学或問(わくもん)』などを著す(岩波版日本思想体系30「熊沢蕃山」)。この『大学或問』は、さまざまな形で流布され、一定程度の影響力を示していたが、公的には蕃山の死後約100年を経た1788年(天明8)に刊行され、翌年発禁処分となっている。



生涯に亘って徳川幕府の執政を批判し続けた人物であったと言えよう。その思想をみると、おおよそ次のような内容になるうか。

武士、とりわけ君主の責務に対する洞察。治山・治水などの具体的提言。農兵論の展開。大名財政を圧迫している参勤交代緩和の必要性。さらに幕府の海外貿易の制限、つまりは鎖国的な政策についての論述などである。総じて当時の幕政の根幹に関わる施策に対する遠慮呵責のない批判が多く含まれている。とくに『大学或問』は「和漢に通ずべからず、古今にわたるべからず、今をすくふ活法なり。其人を待て行はるべし」という断り書きをわざわざ巻頭に記しているとおり、けっして和漢・古今をとわず通用するような遠大なことを言いたいのではなく、わが国における喫緊の課題つまり「今をすくふ活法」としての提言であると自ら述べている。しかしながら江戸時代には、幕藩体制を堅持するための法度として、一般人の政論を禁止した「所士横議」があった。

蕃山の生きた時代は、2代将軍徳川秀忠から5代将軍綱吉の時期にあたっている。幕藩体制安定化に向けた時期でありながら、国内では1631年(寛永8)に倒幕未遂の由井正雪の乱が起こり、1636年(寛永13)には島原の乱が勃発している。しかも幕府財政は3代将軍家光の末期にはすでに窮乏に陥っており、キリシタン問題や、生地を離れ他藩を流浪しているいわゆる浪人問題が幕府を脅かしていた。

年譜資料で蕃山の足跡をさらに辿ってみると、藤井松平宗家と熊沢蕃山の関係はとても深いことが分かる。まずは蕃山の歩みを見ていきたい。

1658年(万治元)京都に移り私塾を開く。1660年(万治3)には豊後国岡藩主中川久清の招聘を受け竹田に赴き土木指導などを行っている。1661年(寛文元)京都に居を移し、多数の武士や町人に講義している。その名声が高まるにつれ幕府に監視されることとなり、とうとう時の京都所司代牧野親成により京都から追放されることとなる。1667年(寛文7)には大和国吉野山(奈良県吉野郡吉野町)に逃れ、さらに山城国鹿背山(現・京都府木津川市)に隠棲。1669年(寛文9)51歳の時には、幕命により播磨国明石藩主であった松平信之の預かりとなる。

## ■ 熊沢蕃山預かりに関する老中からの書翰

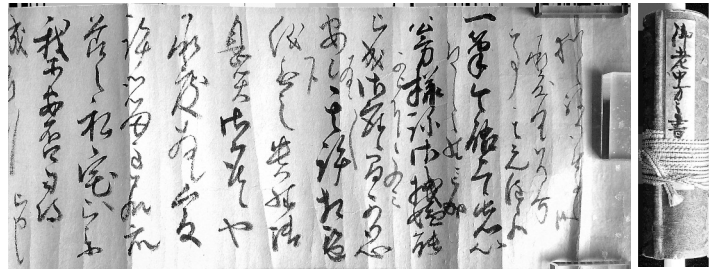
月岡神社(上山市:祭神は藤井松平初代利長と2代信一)に、幕府から信之に宛てた「熊沢蕃山預かり」に関する貴重な書翰が5通残っている。差出人は、老中・京都所司代板倉内膳正重矩からのものが2通、老中久世大和守広之からのものが2通、老中堀田筑前守正俊からのものが1通の

計5通である。

いずれも、蕃山に対して比較的厚意的な心情をもった幕閣たちからのようである。

内容は以下のような主旨である。

老中板倉重矩からの書翰（右写真）を例として現代語訳で引用してみたい。



「了介(蕃山)のこと、ご領内に置いて下さるとのこと、とてもありがたく思います。ご家来衆より彼の方にいつでも気持ちのまま、ご領内に来ると言ってやるようになさって下さい。その時は、この手紙をご使者の通知の中に封じ入れて、彼にお届けさせるようにして下さい。彼もどれだけ喜ぶことでしょう。蕃山がそちらに行っても、御内衆(家臣・家来)は一切会わないようにして下さい。あなた様の指図の人(僧侶や名主など土地の有力者)だけがお会いするようになさって下さい。それも多くても4、5人として下さい。以上」

これを読むと、その後の改易までの展開にかかわってくる重大なポイントがしたためられていることに気づく。蕃山と接する人は、藩主であるあなた(信之)が指名したごく少数(多くても4、5人)の人物に限定しなさいと明記してあるのだ。つまり、蕃山を不特定多数の家臣たちと自由に交流させないようにと記してある。穿って解釈すれば、間違っても藩政にかかわらせたりすることのないよう、暗に付言しているようにも読めるのではなからうか。

もう少し書翰の文面を追ってみることにしたい。

「彼(蕃山-引用者註)は今、世の中に種々の虚説ばかり流布し病気です。時流に合わないのかねがね山中へ籠って、いっさい人に会わないようにとしておりましたが、病気で、また幼少の子どもなどもいて、医者から遠いところにはどうしようもなく、時どき京へも出て来て養生などしているうちに、人も聞き及んで仕方なく公家武士などとも少し行き来しておりました。いよいよ京から遠くに籠らせ、誰にも会わせないようにするつもりでしたが、適当な場所もなく、延引しておりました。先日申し上げたように、貴方様のご領内は(蕃山の)父母のいる所(現在の備前市-引用者註)へ近く、何よりも貴方様のご領内が良いと思っておりましたが、何の繋がりもなく、自分から行きたいとは言えなくておりましたところ、貴方様は、我らが安心して欲しいとの心遣いで、我らより、どうぞ申し込んで、ご領内に置いて下さいと申し出て下さったので、右のように申し上げました。」(傍線引用者/翻刻・現代語訳:矢矧千重子氏)

この一次史料には、「彼(蕃山-引用者註)は今、世の中に種々の虚説ばかり流布し…」とあり、「虚説」=幕政批判が問題視されて、明石藩主であった松平信之に預けられたことを明確に裏付けている。しかし、このとき蕃山はまだ城内監禁ではなく、信之の管理のもと、領内にある太山寺(現神戸市西区)に幽閉されていた。以後、著述に専念し『集義和書』を1672年(寛文12)に、山・川・森を治めることを国土経営の基本とする考えを説いた『集義外書』を1679年(延宝7)に著し、同年、信之の大和郡山への転封に伴い、蕃山も大和国矢田山(現・奈良県大和郡山市)に移住。この時も城内での監禁や謹慎ではなかった。だが、1687年(貞享4)、後に『大学或問』にまとめられることになる諸々の言説により本格的に幕政を批判、69歳の高齢にもかかわらず、蕃山は幕命により松平信之の嫡子で家督を継いだ下総国古河藩主・松平忠之に預けられ、古河城内の竜崎頼政邸にいよいよ蟄居謹慎させられることになる。ただ、城内蟄居謹慎とはいえ番人もつかない、言うなれば比較的ゆるい軟禁であったようである。

\* \* \*

このように、身体の拘束を伴うような厳しい処分ではなかった事が、逆に藤井松平宗家に禍い

をもたらしてしまったとも考えられる。それ由であろうか、忠之は古河藩にとっては極めて有意義な、しかしながら幕府にとっては許し難い「あらぬふるまひ」を犯してしまうことになったのではないか。つまり幕府にとって不都合な人物を監視するために預かったはずの蕃山を、忠之は積極的に藩政に関与させてしまったのではないか。最初に蕃山を預かった明石時代の信之が老中たちから告げられていた「家臣・家来は蕃山に会わないように」という忠告を、代替わりを含めた時間の推移のなか、次第にその縛りについての緊張感を喪失させていったのかも知れない。その事実が幕府に露見し、その処分として藤井松平宗家は改易寸前にまで追いやられてしまうことになったと考えられるのである。改易に至る理由として、状況的にみても、筆者にはそれ以外考えられないのである。

「失心」「御狂疾」などは実際そう簡単に起こるものではないであろうし、また幕府の立場からすれば、改易の理由としての常套句、使い勝手がよく便利なことばなのであろう。

ではなぜ『藤井御傳記』に敢えて「御狂疾に罹らせ玉ひ、…中略…古河城召上げられ」などと詳述したのか。筆者の仮説を完結させる為にはどうしてもこの問いに答えなければなるまい。つまり、筆者の考えはこうだ。幕政批判をやめない経世家熊沢蕃山を重用した廉での改易は、徳川家と姻戚関係にある藤井松平氏としては、何があっても表沙汰には出来ないことであり、蕃山を擁護したということになれば、藤井松平氏は謀反＝倒幕思想に同調したという誹りを末代まで受けることになることと恐れたのではないか。そこで藩主忠之の「御狂疾」が原因の改易であったことにすれば不名誉なニュアンスは意味のすり替えによってかなり薄らぐ。そう考えたに違いない。真相は藩にとって秘中の秘であったのである。

そのため『藤井御傳記』に、カモフラージュとして念入りに忠之の狂疾による改易という筋立てを綴ったということではないのだろうか。

似たような例がある。先述したが、1648年（慶安1）、藤井松平4代忠国が丹波篠山を領していた時のことである。改易となった丹波福知山城の接收に、幕命をうけ藤井松平氏が出役した一件があったが、藩主稲葉紀通が謀反の疑いをかけられ（実際に謀反を計画していたかは不明）鉄砲自殺した（これも不明）際の改易理由も、なんと藩主稲葉紀通の「発狂」であった。

## ■ 古河藩主松平忠之と熊沢蕃山

では、忠之は幕府に睨まれていた熊沢蕃山を、どのように藩政に登用してしまったのか。

当時の古河をみると、徳川幕府にとって陸路、海運、舟運いずれにおいても重要な位置にあり、北方への備えにおいては軍事的にも重要なポイントであった。そのことをまず踏まえておく必要がある。そのうえで、蕃山思想の主要な部分に治山・治水に関する施策があること。そして下総国古河は、幕府も長期に亘って利根川支流の河川改修工事を繰り返して来た地域であったこと。当時も領内を流れる渡良瀬川の氾濫が常態化し、藩はその対策に窮していたこと。そこで、蕃山の得意とする治山・治水の技術が家臣たちに頼りにされ、忠之は謹慎の身にあった蕃山を流域の改修や干拓事業に関わらせることを黙認してしまったのではないか。蕃山の指導を仰ぎながら古河藩領内では成果を挙げていたのである。そのひとつ、蕃山溜が現在も遺っている。

一方、信之の死後、蕃山の幕政批判は止まることなく、前述したように忠之は1687年（貞享4）再び下った幕命によりやむなく城内にて蟄居謹慎させることとなる。そして1691年（元禄4）蕃山は死去。忠之は領内大堤の鯉延寺（けいえんじ）に篤く葬ったのである。

謎めいたことが起こるのはその2年後のことである。1693年（元禄6）11月23日、老中戸田忠昌よりの使者が江戸の古河藩邸に到着。24日その使者の応対をした忠之は、その夜に、突如

自らの髻(もとどり=髪を頭上に集めて束ねたところ)を落とすのである。翌朝、家臣の若山六郎左衛門によってその一切が幕府に報告され、その日のうちに「失心」(『徳川実紀』の表現)を理由に改易となってしまったのである。そして2年後の1695年(元禄8)、忠之は江戸で悲運にも数え22歳で没している。戒名は浄修院殿前日州行譽道高大居士。

忠之の生涯と蕃山の関わりを整理するとこのような経過であったと考えられる。繰り返しになるがポイントは老中戸田忠昌より遣わされた使者の任務が何であったのか。忠之とどのような言葉を交わしたのかである。私見では老中戸田忠昌の使者は、まだ19歳であった忠之に対して、その場で容赦なく幕命=改易を告げたのではあるまいか。事の重大さに忠之は呆然としたに違いない。「御狂疾」が創作ではなく、その直後実際に起こっていたとしても、そのショックによって引き起こされた病変であったと考えれば辻褃は合う。その場合でも「御狂疾」が改易の理由ではない。時系列としては改易宣告がもたらした「御狂疾」と考えられるからである。

\* \* \*

江戸時代中期に纏められたとされる『土芥寇讎記』(どかいこうしゅうき)という史料について論じた田添郁多氏の「『土芥寇讎記』と改易大名の関係について」がある。それには、1690年(元禄3)~1709(享和元)つまり綱吉政権期に改易された各藩の藩主や政治状況についての解説が載っている。当然のことながら忠之の名も記されているが、『藤井御傳記』同様、理由に関しては真相もふくめて触れられていないのである。他藩についてはそれなりの理由が記されているので、どことなく不自然な感じがする。

さて、5代将軍綱吉は、儒学の中でも治世や統治と相性のいい朱子学に傾倒し、実践によって早急に現状を変えていこうとする陽明学に対しては否定的な考えを持っていた。加えて、それまで執政を幕臣に任せることの多かった4代家綱時代への反動もあり、綱吉は将軍としての権勢を取り戻すべく、家康直系の親藩までも含め多くの大名の改易を断行したのである。藤井松平宗家の改易騒動もその一つと考えられる。幕内での執政のあり方を巡る権力闘争が背景としてあったとみてほぼ間違いはなさそうである。将軍が家綱から綱吉へ移行する際、10人の老中のうち5人のが交替し、3人いた老中首座は1人になっているのもそのあらわれのように思われてならない。

さらに、江戸時代の改易の殆どを網羅していると思われる浪江健雄著『江戸幕府法における改易について』には、290件にも及ぶ事例が紹介されているが、藤井松平氏については一切触れられていないのも不思議である。後に家名存続が許された特殊な除封であったからなのか。

一方、松平忠之と熊沢蕃山の蜜月を物語っている貴重な資料がある。岡山県備前市にある「熊沢蕃山顕彰保存会」が2020年(令和2)に発行した「熊沢蕃山先生没後330年記念 郷土ゆかりの英傑・熊沢蕃山」第6話「終焉の地 古河での蕃山」である。

「浪人の身を以て天下国家の政事を論ずる「所士横議」の罪により、古河においてそのまま(熊沢蕃山は-引用者註)禁固の処分を受け諸国行脚の自由を奪われた。しかし蕃山は禁固の身ながら藩主の配慮等により、領内各地に出向くなど、かなりの自由が許されていたようである。そして、藩主以下家老藩士たちが蕃山を頼りにし、行政上でも指導を受け、蕃山溜(だまり)、干拓などの治水事業を建策し実践指導も行っている。これらの事業により古河藩は一挙に約4万石の増産になったと言われている。…中略…藩主松平忠之は、聖人的風格を持つ蕃山の人間的魅力に傾注しており、その逝去に際し、それを惜しみ、人目もはばからず慟哭したと伝えられている。」

これはあくまでも熊沢蕃山を顕彰する保存会がまとめた文章である。纏めるにあたって保存

会ではどのような史料をもとに作成したのか、ここでは出典を明らかにしていない。また、会の性格上表現としてはいささか蕃山を神格化しようとしている傾向を感じなくもないが、史実を無視しているとも考えにくく、忠之が蕃山とすこぶる良好な関係にあったことを如実に示しているように読める。

## ■ その後の藤井松平氏と版籍奉還

以上見て来たように、筆者の知見の及ぶ範囲においてだが、藤井松平宗家が改易寸前にまで追いやられた説得力のある理由（史実としての具体的な経緯）が明記されている史料（資料）をこれまで目にすることがなく、熊沢蕃山という一人の思想家の存在が改易に深く関わっているのではという考えにどうしても逢着し、さらに拘泥してしまう自分がある。だが、それは状況証拠を基にした筆者の推論に過ぎないことをやはり断っておかなければなるまい。言い換えれば、その時期にそれ以外の理由を筆者は見出せないのである。ただ不幸中の幸い、忠之が1万石加増の9万石で5代信之から家督を継承したとき、もちろん改易される前のことになるが、その加増分の1万石を忠之は弟の信通に与え、信通はその1万石で興留藩を立藩していたことである。さらに改易は完全な改易でもなく、幕府は信通に対し、それまでの歴代藤井松平氏の徳川家へのただならぬ功績を認め、家名の存続をも許し、1693年（元禄6）2万石加増のうえ3万石で備中庭瀬への移封を命じている。史料に、それを裏付ける記述があるので見ておきたい。

「日向守依異病 古河城被召上乍先祖旧功殊家筋思召齋宮へ家相続被仰付 2万石御足都合3万石被下置備中庭瀬へ所替被仰付候。庭瀬は御代官万年長十郎より受取り玉ふ。其書にいふ。／松平齋宮／同道／戸田采女正／松平下野守／松浦壱岐守」（「師岡政宜家記」より）

そして、それから4年後の1697年（元禄10）、藤井松平宗家最後の封地である出羽国上山への転封ということになったわけである。

藤井松平氏による上山藩統治はそれから約170年の長きに亘ったが、その間はずっと3万石（越後領も含めて）で推移していた。だが、1868年（慶応4）に起こった戊辰戦争において、上山藩は奥羽越列藩同盟の一員として新政府軍と戦い、慶応4年（1868）9月ついに恭順降伏するに至る。その戦後処理として3千石減封の沙汰を告げられ、2万7千石にまで削封されてしまうわけである。上山市史編集資料22「幕末・明治維新資料」を紐解いてみると67～68頁に次のよう記されている。

「今般佐竹右京太夫（秋田）、溝口伯耆守（新発田）両藩へ取締仰付られたれば、早々地所引渡申すべき旨御沙汰候事／12月 行政官／（別紙）羽前國村山郡 菖蒲村 大門村 大久保村 小笹村 上生居村 須田板村 檜下村 永野村／右之通上地相成候事」

さらに「旧高旧領取調帳」をみると、8ヶ村＝3千石にあたる削封分は、秋田藩と新発田藩の官吏が在任していた当時の酒田民政局の管轄となったということのようである。

\* \* \*

藤井松平宗家の改易騒動を概観してきたが、その処遇一つをとっても、一大名の盛衰など幕府の胸先三寸でいかようにもなるという例でもあろう。ただ、藤井松平宗家に関して、本格的に改易の理由を探ることは、筆者のような素人歴史愛好家のレベルでは、史料の不足から、実に困難な作業であると言わざるを得ない。賢明な諸氏からのご指摘やご教示を待ちたい。

